

日常臨床で必ず出会う リウマチ膠原病疾患 -自信がもてる実践ガイド

リウマチ膠原病疾患は、外来や病棟診療の現場において出会うことは決してまれではなく、関節痛、発熱、倦怠感、皮疹など、一見非特異的な症候で発症することもしばしばあります。限られた時間のなかで、疑い・鑑別診断を行い・適切な検査をして、リウマチ膠原病疾患を拾い上げる力は、一般内科医・若手臨床医にとっても大切なスキルといえます。しかし、一般的にその診断過程は非専門医にとって複雑に見えますし、治療に関しては確かにこの10～15年で劇的に進化しており、日常臨床のなかで常にアップデートを続けることは容易ではありません。

本特集「日常臨床で必ず出会うリウマチ膠原病疾患—自信がもてる実践ガイド」では、まさに“臨床の現場で迷わないための嗅覚と判断力”を養うことを目的に、明日から使える知識を凝縮しました。

「総論」では、関節痛・原因不明の発熱・全身の疼痛といった症候からどのように鑑別診断へアプローチするか、検査(主に血液検査・自己抗体)を“いつ、何のために行うか”を、症候学の視点から再整理し、検査を出すタイミングや結果の解釈など、判断に迷いがちなポイントを具体的に解説しています。

「各論」では、関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、Sjögren 病、炎症性筋疾患、全身性強皮症、ANCA 関連血管炎、リウマチ性多発筋痛症・巨細胞性動脈炎・高安動脈炎、脊椎関節炎、結晶性関節炎といった日常臨床で遭遇する頻度の高い疾患を取り上げ、典型例はもちろん、非典型例での“疑う視点”を豊富な臨床経験に基づいて提示します。「この症候からこの疾患を疑う」「この時点で専門科へ紹介する」といった臨床判断の実際に踏み込んだポイントについても解説しています。

「治療薬アップデート」では、〇〇〇マブ、〇〇〇ニブなど、最近耳にする機会が増えた生物学的製剤(TNF 阻害薬・IL-6 阻害薬・IL-7 阻害薬など)と JAK 阻害薬を中心に、最新エビデンスと実臨床を踏まえた「使いこなす術」に焦点を当てています。“どのように使い、どのように副作用をモニタリングするか”といった、実臨床に必要な情報の提供を目指しました。

本特集は、日常臨床の最前線で活躍する新進気鋭の臨床医が執筆を担当しており、経験に裏打ちされた実践知が随所に盛り込まれています。当初は一般内科を中心とした内科系臨床医、若手医師を対象として企画しましたが、完成した本特集は、私を含めた専門医にも非常に有益なものとなったと実感しています。

本特集を通じ、読者の皆さまがリウマチ膠原病診療に自信をもち、自らの臨床力をもう一段高めていただけることを心より願っております。

中部ろうさい病院リウマチ膠原病科
滝澤直歩